

現代俳句を読む

篠原 悠子

桜咲く食うてゆければそれだけで

山田真砂年

荻のこゑ大河も末は鹹き水

秋風に人は旅してきたりけり

驢馬見ればいつも打たれてをる残暑

母逝くや庭に散り敷く花蜜柑

山田真砂年句集 『夜は昔の』 角川書店刊

第三句集。「未来図」解散後の令和二年「稲」を創刊。あとが

きに「俳句は実感を大事に詠みたい。虚構を描いてもそこに実感が宿り、リアリティーが滲むような俳句でありたい」とある。

「実感」は誰もが言うが、作者のそれは一味違う。描写によって伝えられる思いに「生きている実感」を求めろのだ。

一、二句目、待っていた桜に、食ってゆければ良いと言う。

桜を眺められるのは束の間、必要以上は望むまいと自分に言い聞かせる。足を地につけて生きる人としての覚悟である。エネルギーに満ちた大河もいずれは鹹い海に呑みこまれ一体化してしまう宿命を見る。一面の荻のさやぎはこの変転を眺める役割として配される。時間軸から見ると「生の実感」といえる。

三、四句目、旅の句も多いが行先は有名観光地や文明国ではない。シリア、ヨルダンから中国ウイグル、トルコなど厳しい気候風土の国々である。珍しい風物より、どんな風土や条件の下でも変わらない人々の営みに目が向く。秋風の中、自分も含めて「人」は昔から旅を続けて来た。残暑の中、驢馬を使役して生きてきた。根本に大差はないという発見、人というものの普遍的なあり方を捉える。

五句目、心身共に衰えてゆく母上とその死がテーマである。いつか来る命終の時を「庭一面の花蜜柑」の香に重ねる。大切な人の終焉を受け止める心のありようが惻々と伝わる。こうした実感の深さこそ、師鍵和田柚子の思いを受け継ぎ、さらなる高みをめざす作者の円熟した境地と言ってよい。

(「稲」主宰)